

巻 頭 言

河北潟がなくなったら？

— 発刊に寄せて —

定塚謙二

アラル海は中央アジアのカザフスタンとウズベクスタンにまたがる世界第4位の大鹹水湖で、かつ無口湖である。約35年前の記録では面積約7万km²で、四国と九州を合わせた面積よりも広かった。その湖が21世紀には世界地図の上から消える運命にあると警告されている（田辺和祐著『生物と環境』東京教学社）。

理由は湖に流入するアムダリアとシルダリアの両大河から水を引き、周辺の開拓農地に大規模な灌漑用水として利用するようになったために、現在では面積が約40%に、水量は70%にまで減少している。灌漑のためシルダリアは途中で水がなくなり、アムダリアは冬季間だけ僅かな水を湖に供給しているにすぎない。その結果、30年間に水位が10mも下がり、塩分濃度も海水に近くなって多くの淡水魚が死滅したばかりでなく、貴重な固有種もいなくなったものと推測されている。また、灌漑のおかげで綿花栽培が大規模に行えるようになり、旧ソ連全体の綿花の95%の生産高を上げることができ、他の農業生産も大幅に向上した。しかしアラル海の水位は年々下がり続け、かつての湖底にはラクダが歩いている現状といわれる。漁業で栄えたアラリスク市では失業者が増加しているのみならず、湖底から舞い上がる莫大な量の砂と塩分が周辺の農地に飛散し、農業に大きなダメージを与えているという。さらにアラル海の湖面の縮小に伴い、豊富な水のおかげで夏は涼しく冬は暖かかった気候が、その逆の厳しい内陸性気候に変わってしまった。農民は従来通りの生産をあげるために大量の化学肥料・農薬を投与した結果、飲料水は塩分と肥料・農薬の汚染で住民の健康にも深刻な影響が既に出ているという。乳幼児の死亡率が近年激増しているのはその顕著な現れであろう。失ってみて初めて判る偉大な自然のシステムである。

上記の例は、豊かな自然の復元力と、海洋性気候に恵まれたわが国では考えられない現象ではある。しかし、人間が自然の大規模な改変を目先の利益だけを考えて行くと、取り返しのつかないおつりに見舞われるという厳しい教訓といえるであろう。

“河北潟がなくなったら？”どのような影響もたらされるかという予測は極めて困難である。しかし、そのような発想から総合的研究に着手するのも一つの価値ある手段であろう。自然の仕組みを自然科学的な面からのみ研究をしても、人間と自然との関わりあいを理解する事は不可能である。ましてわが国では人工が加わっていない自然はほとんど無いといってよい。だからこそ我々の郷土において、人間と自然がいかに共存してきたかという歴史と文化を度外視してはこれからの自然との共存はあり得ない。

‘河北潟湖沼研究所’が発足して既に2年が経過し、少しずつその基盤が整いつつあり、機関誌の発刊にまで漕ぎ着けた。自然・社会・人文科学を網羅した地域の総合研究組織としては数少ない存在になるであろう。積極的な投稿をお願いしてユニークな価値ある機関誌として成長することを期待したい。

(金沢大学名誉教授)